

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01350

研究課題名（和文）人はなぜ国家形成へと向かったのか：日英中を対象としたミクロ-マクロ架橋的比較研究

研究課題名（英文）Why did people form the state?: comparative micro and macro-scale combined studies between Japan, Britain and China

研究代表者

溝口 孝司（Mizoguchi, Koji）

九州大学・比較社会文化研究院・教授

研究者番号：80264109

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,600,000円

研究成果の概要（和文）：近代において、国家を主軸として保証されてきた人と人との繋がり・社会の安定は、今日、グローバル化を中心とするさまざまな問題によって揺らぎつつある。人はなぜ広域にまとまり繋がるようになったのか、個々の親族集団、共同体に暮らし、基本的に平等的社会関係を維持していた人々はなぜ特定の人や組織に従うようになっていったのか。本研究プロジェクトは、無文字社会の歴史復元の強力な手段である考古学によって、社会の複雑化・国家形成段階にあたる日本列島の弥生・古墳時代、中国新石器時代後半期から商・周代、ブリテン島南部青器時代から鉄器時代を対象として、その過程を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果として国家形成の一般的モデル、＜三段階モデル＞を提示した。これは段階1：相互交渉の初発の拡張 中心性の創発と成層固定の第一段階 社会全体的姻族ネットワークの解体の第一段階、段階2：複数部族の連鎖 上位層姻族ネットワークの生成 - 社会全体的姻族ネットワークの解体の第二段階 祖霊への贈与 - 反対給付としての威信財 祖霊の超越存在化の第一段階 威信財交易 = 死者のエコノミー、段階3：複数部族連鎖の拡張 上位層姻族ネットワークの変容 祖霊の超越存在化の第二段階 = 人格神化 人格神への無限の贈与 としてまとめられる。これを基本として世界各地の国家形成過程を比較する基盤が形成された。

研究成果の概要（英文）：In the modern era, the stability of human relationships and society, which had been primarily guaranteed by the state, is now being shaken by various problems centered on globalization. Why did people come to coexist and connect over a wide area? Why did people who lived in individual kinship groups and communities, maintaining basically egalitarian social relations, come to follow specific individuals and organizations? This research project used archaeology, a powerful tool for reconstructing the history of unwritten societies, to elucidate these processes in the Yayoi and Kofun periods in the Japanese archipelago, the late Neolithic to Shang and Zhou periods in China, and the Bronze Age to Iron Age in southern Britain.

研究分野：考古学

キーワード：社会複雑化 国家形成 ミクロ-マクロ架橋 比較考古学 社会考古学

1. 研究開始当初の背景

人類史の中での近代において、様々な社会単位とその安定維持の基盤は<国家>に置かれてきた。今日その基盤は経済的・文化的グローバル化の進展によって多層的に揺らいでいる。今日、グローバル化した世界が体験している困難は、さまざまな社会単位の安定性の喪失、それら単位の相互交渉・調整の困難などの現象の表れである。グローバル化は、近代的社会編成諸傾向の進化の帰結とすることができるならば、それは、さかのぼって、古代国家(とそれを取り巻くさまざまな社会的単位)において形成された基盤(今日のグローバル化と対比可能な現象がいわゆる'pristine civilizations'形成以前に生じたことはない)、さらにそこに向かう先史時代の社会の複雑化が根源にあるといえる。そのような観点からすれば、今日のグローバル化による諸問題の解決にもまた、人間<社会>の原基的形成とその変容過程の詳細の解明が寄与すると考えられるし、そのような立場から多くの研究が行われている。いわゆる「先史時代」以来、原基的小規模出自集団編成から、社会の複雑性と規模が増大し(ノする場合があり)、その帰結としての国家形成に至った(ノ至る場合があった)。それでは、人はそもそもなぜ広域に繋がったのか、なぜ人は秩序を守り制度に従うようになったのか、究極的には、広域にわたる人間集団の秩序はなぜ可能となり、なぜ揺らいだのか。こうした問題は、社会的存在としての人間の原基的諸特性に関連しつつ国家形成の過程で反復して沸き起こり、(ある場合においては)解決されてきた。(解決に至らない場合、それに関与することとなった社会単位はいわゆる<崩壊(collapse)>を経験することとなった。)先史時代を起点とするその過程を復元するためには、考古学を中心とするアプローチが必須である。

もう少し具体的に述べよう。いわゆる「グローバル化」が進展しつつある中で、それを導いた<近代>という枠組みそのものが揺らぎ、前近代へと退化してゆくかのような不穏な空気が流れている。人類史中における近代において、様々な社会単位とその安定維持の基盤は<国家>に依存する度合いを深めてきたが、今日の世界が体験している困難、様々な社会単位の安定性の喪失と単位の相互交渉・調整の困難化は、経済的・文化的な多様かつ多層的領野に生成した矛盾が国家の枠組みを揺るがすことが重大な原因となっている。このような困難の根本には、三つの根幹的問い：

1)人はそもそもなぜ広域に繋がるのか/繋がることのできるのか、

2)人はそもそもなぜ秩序を守り制度に従うのか、

そして、究極的には、

3)広域にわたる人間集団の秩序はなぜ可能となり/必然化し、なぜ揺らぐのか、

が存在する。これらの問題を、<国家>そのものが誕生した<先史時代>に立ち戻って追及することは、今日の問題解決についても、重要な示唆を与えてくれるであろう。先史時代に起こった社会の複雑性・規模の増大、その帰結としての国家形成の過程は、社会的存在としての人間の原基的諸特性にも大きく関連付けられる。このことは、上記三つの問題について、マクロな制度論的・規範論的問題(institutional/normative problems)としてのみならず、ミクロな行為論的問題としてもアプローチする必要を指し示す。そのような観点から、こうした国家形成へのマクロ、ミクロな視座を架橋し、それぞれを考古学資料を用いて復元し、その意義・含意を明らかにすることを、本研究の研究課題の核心として設定した。

2. 研究の目的

社会の複雑性の増大とその帰結としての国家形成の問題は、a)社会を構成する組織単位、機能的諸単位の分化と成層化の進展の問題、b)社会統合の規模の増大の問題、c)分化・成層化・規模の増大に対応して様々な秩序がいかに維持されたかの問題、について、これら問題それぞれに異なる強度で焦点を当てつつ、a,b,cが有機的に相互作用しつつ進展してゆく過程として分析されてきた。その視点は上述の通り広義の制度分析・規範分析であり、社会現象の諸単位の存在を前提とした上で、その分化、規模の増大、それらの維持のメカニズムについての考察が加えられてきた。しかし、社会現象の諸単位がいかに存在するに至ったのか、いかに再生産され、変容したのかは、「社会を構成する個々人の思考と行動のパターン化、秩序化とその変容メカニズムの問題」として捉え直すことが必要である。このような認識から、本研究は、次のような項目について重点を置いて、3つの地域をケーススタディーとして、考察をおこなうこととした。a)社会集団の再生産と繋がりの基層をなす親族集団・組織の構造と範囲が形成・再生産された場面としての葬送における人々の行為(相互交渉)と体験の具体的復元、b)居住の場としての集落における人々の行為(相互交渉)と体験の具体的復元、c)社会集団間の関係と繋がりが意識的に表象され、また無意識的に反映された物質文化の地域性の研究を通じた人々の相互交渉・コミュニケーションとその変容過程の具体的復元、d)広域社会集団の統合と成層秩序に動員されたさまざまな資源、中でもそれらの達成に必要な条件的な機能を果たしたことが確からしい<威信財>の分析。以上を中心とする項目の研究を総合して、<秩序形成>とその維持のメカニズムを、それを構造化した象徴性と戦略的思考の内実の復元、それらを必然/可能とした条件の復元を通じて解明することを、本研究プロジェクトの目的として設定した。

3. 研究の方法

いわゆる一次国家形成 (Pristine state formation) の過程のほぼ総体は < 先史時代 > に起こったため、その研究は考古学を中心に推進されてきた。そして、その問題意識は、近代国家の基盤の再生産のための示唆を得ることを重要な目的の一つとしてきた。採用されてきた具体的アプローチは広義の「制度分析・規範分析 (institutional/normative analyses)」であり、社会現象、すなわち政治・経済・宗教などの諸単位の存在を前提とした上で、その分化、規模の増大、それらの維持のメカニズムについてのいわばマクロな視点からの考察が加えられてきた。しかし、グローバル化における今日の問題でも明らかかなように、「生活社会の危機」、すなわち個々人のアイデンティティや存在論的セキュリティ ('Ontological Security') の危機こそが世論を動かし、危機の原動力となっている。ゆえに、社会現象の諸単位の生成、再生産、変容の過程を、社会を構成する個々人の思考と行動のパターン化、秩序化とその変容メカニズムの問題としてよりミクロな視点から捉え直すことが必要となっている。最近の考古学理論の発達による「行為理論的 (practice theory)・構造化理論 (structuration theory) 的アプローチ」は、考古資料を遺した個々人の思考と行動と、その基盤としての社会構造・システムの相互関与・変容の復元を可能にしている。すなわち、考古学を中心とする古代国家形成過程研究においては、これまでの制度論的規範論的国家形成過程研究枠組みを、行為理論的・構造化理論的アプローチと接合・架橋することによって有機的に改変することが、今日求められているのである。また、研究代表者は以上に加え、< 社会 > 現象 思考 (言説的・実践的の両者を含む) と行動のパターンの再生産 (< reproduction >) の最小基本単位として相互交渉 (< interaction > : 基本的に対面的)・コミュニケーション (< communication > : さまざまな非対面的それを含む) を指定し、それらを < システム > として把握し、それらの分化 (< differentiation >)、それら相互のカップリング (< coupling >)、それら個々、また相互にカップリングしたそれらの時空間的延長の変化がもたらす相互交渉・コミュニケーションの再生産の困難化 < 社会 (現象) > の再生産の困難化の実態と、その克服 (ノ失敗) の様態と、それへの対応の様態の多様性について、通時的・共時的に解明することを続けてきた。この作業は、行為理論・構造化理論の弱点である広域社会秩序の< 創発 > と再生産のメカニズムについて、それを相互交渉 / コミュニケーション・システムと組織システムと全体社会システムそれぞれの内的、またそれぞれの間の相互刺激的 < カップリング > の様態として把握することにより克服する試みでもあった。具体的には例えば、古墳築造とそこでの葬送諸儀礼 = 古墳葬送コミュニケーション・システム (とでも仮称される実態) の構造的な特性と再生産のメカニズムの特性が、その再生産に関与する組織システムの規模・構成・再生産のメカニズムとそれらの大規模統合のメカニズムとどのように相互刺激的・構築的に関わるのかを解明することにより、特定の相互交渉 / コミュニケーションの再生産というマイクロな過程と、それらの再生産を「通じて」維持・再生産される多数の組織システムの大規模広域統合過程をそれぞれに明らかにすることが可能となるのである。

本研究では、日本列島とブリテン島という大陸縁辺に位置する二つの大きな島嶼と、一次国家形成の舞台となった中国黄河流域を対象として、これらの地域における前国家社会の複雑性・複合性の増大過程と国家形成のメカニズムのモデル化と相互比較を行い、「広域にわたる人間集団の秩序はなぜ可能となり / 必然化し、なぜ揺らぐのか」を解明することを目指した。日本列島とブリテン島は、それぞれ中国諸王朝、ローマ帝国の縁辺部で国家形成過程を経験した。日本列島弥生時代～古墳時代、ブリテン島青銅器時代～鉄器時代の双方において、社会組織の成層化と政治的統合は出自集団を基盤として進展したことが想定されており、これについては黄河流域地域においても同様である。しかしこれら三つの地域の間には、A) 形成された統合体の規模、B) 居住パターン of 構造化、C) 統合の象徴的物的媒体・シンボルなどにおいて顕著な相違が指摘できる。殊に、初期国家形成段階における統合領域の面積と成層秩序表象の形式には著しい違いが認められ、これは、それぞれの地域のその後の歴史の展開にも大きく影響したと考えられる。これらの共通性と差異を、社会システムを構成するサブシステムの地域特性といった形で平準化して考察するのみならず、個々の差異の背後にある個々人の思考と行為、そしてそれらの構成要因、コンテクスト的状况・背景の歴史的個別・特異性にもアプローチし、それを通じて三地域の国家形成過程の共通性と差異の要因、また、なぜ人類は < 国家 > という組織の形成へと向かったのかの解明を試みた。

4. 研究成果

実際のモデル構築の概要を以下の三段階モデルとして提示した。

段階 1: 第 1 段階は、どのような要因であれ、【人口の増大】により、【定住的な集団単位 (= 居住単位) が一定地域に拡散】し、【ネットワークを形成】することを指標とする。

そのような単位はコミュニケーション的には対面的相互交渉によるコミュニケーション・システム形成・再生産維持の単位であると同時に、組織としては外婚単位であることが民族誌事例などから確からしい。このような単位が一定地域に拡散するメカニズムとして、定住的な個々の単位の領域 (territory) の資源が人口支持力の上限に達することによる < 分村 (hamlet budding-off/settlement splits) がその主要なものとして想定される。そうすると、分村元単位 ('親村') と分村単位 ('子村') は、元来は対面的相互交渉によるコミュニケーション・システム形成・再生産維持の単位であったのが空間的に分割されることとなり、それぞれのメンバーの対面的相

互交渉の頻度も著しく低下するとともに断続的なものとならざるを得ない。分村元単位と分村単位は、人類学的ターミノロジーにおけるソダリティー (sodalities) ないしは氏族 (クラン: clans) 的非居住団体 (non-residential corporate groupings) を構成することとなる。(その場合、小村を構成することとなった単位はリネージ (lineages) 的居住団体を構成することとなる。) このソダリティー的集団が、多くの民族誌の示すところに拠れば外婚的出自集団であるとすれば、その内的コミュニケーションは維持・再生産される機能的必要があり、このソダリティー単位での (リネージ的居住団体間の) コミュニケーション・システムの維持・再生産が、出自集団成員間の友愛原理に基づく反対給付を要求しない贈与・共有の維持・再生産の困難化として問題化する。同時に、拡散分布した諸単位は、移転先で隣人となった単位相互の相互交渉・交換を通じて新たなコミュニケーション・システムを形成することとなり、これも当初、出自集団内に共有される友愛原理に支持・媒介されることのないコミュニケーションの再生産という困難を克服しなければならない。しかし、婚姻パートナーの交換により、異なる氏族的ソダリティーに属する単位間の姻族的関係性は連鎖する / せざるを得ないので、社会全体的姻族ネットワークが形成されることとなる。これにより、上記二種の困難は媒介されて緩和されることとなる。ちなみに、狩猟採集を生業システムとするバンドの単位間の関係性は流動的であり、安定した姻族ネットワークの形成には至らないのが常態であることは重要であり、付言しておく。

このように

- 対面的相互交渉が常態的に可能な時空間的領野を超えてコミュニケーション・システムが維持・再生産される状況の出来
- そのような困難への対応の媒介としての社会全体的姻族ネットワークの形成

により特徴付けられる段階 1 であるが、このような状況における単位間関係においては、< 互酬 > 原則が概ね貫徹する状況であったと考えられる。これは < 互酬 > 原則の維持と姻族ネットワークの維持とが相互媒介的關係にあることから演繹される。このような状況であるので、複数のソダリティー的組織が構成する < 部族 > 的単位の内部において、単位間に < 互酬 > 的反対給付の遅延等による単位間関係の不均衡 / 成層化が生ずることがあっても、それは永続的社会階層の形成に直結するような性質のものではなかったことが演繹される。

この点において留保すべきなのは、集団単位間に形成された相互交渉・交換ネットワークは、単位間交渉・交換の媒介頻度、それに相関する物財・情報の流通量差に起因する < 中心性 (centrality) > の差異を創発し、その高低により < 部族 > 的単位の内部において中心・周辺差異の形成が始まったであろうことである。この差異は、居住単位を連結するソダリティーと、それらを横断する全体社会的姻族ネットワークの存在により集団単位間関係の固定的成層化には直結しなかったであろうが、その萌芽的傾向性は発現していたであろう。そしてそれは、形成されつつある中心 (地) 的単位における、< コミュニケーション・システム > 維持・再生産の < 場 (locales) > としての機能的強度の上昇をもたらしたと推測される。

段階 2: 第 2 段階は、【 < 部族 > 的単位間の相互交渉・交換の量的拡大と質的強化】、【 全体社会的姻族ネットワークの解体の開始】により特徴付けられる。

< 部族 > 的単位それぞれの < 中心地 > 的集団単位には、第 1 段階において < コミュニケーション・システム > 維持・再生産の < 場 > としての機能的強度の上昇が起こっていたが、第 2 段階には < 部族 > 的単位間の相互交渉・交換により、それらの単位がネットワーク的に結合するとともに < 中心地 > 的集団がこのような (この位相での) すなわち結合されたネットワーク隣接 < 部族 > 的単位の < 中心地 > 的集団との相互交渉・交換を担い、それによる入手獲得物を < 周辺 / 衛星 > 的集団に「分配する」こととなる。各 < 部族 > 的単位内部におけるこのような < 中心 > - < 衛星 > 間の相互交渉・交換そのものは、前節での記述の通り、< 中心 > - < 衛星 > 的集団単位間関係がソダリティー的組織 (クラン的出自集団) の分節 (リネージ的単位) 間の関係であることから、出自集団成員間の友愛原理に基づく反対給付を要求しない贈与・共有に依拠して行われる。しかし、全体社会的姻族ネットワークの最大範囲 < 部族 > 的単位の外部からもたらされた物財には、各 < 部族 > 的単位内部における < 衛星 > 的単位から < 中心地 > 的単位への反対給付において、姻族としての相互的義務感・相互扶助感覚などに媒介された負債の完全な返済が不可能である。すなわち、異なる < 部族 > 的単位の < 中心地 > 的手段間の (婚姻パートナーの交換を含む) 相互交渉・交換によって互酬制の維持に不可欠な姻族関係が形成されるが、それを通じて入手された、異なる < 部族 > 的単位からもたらされた物財に対して、所属 < 部族 > 的単位の < 中心地 > 的単位に対する反対給付は可能でも、その物財の供給源としての異なる < 部族 > 的単位 (の < 中心地 > 的集団) への直接的反対給付は不可能で、所属 < 部族 > 的単位の < 中心地 > 的単位によるそれに依存せねばならない。結果として所属 < 部族 > 的単位の < 中心地 > 的単位への負債は、完全に返済することが不可能となるのである。その結果、< 衛星 > 的単位からの < 中心地的 > 単位への負債感永続的に残存することとなる。結果として、第 2 段階において、< 部族 > 的単位内部における < 中心 > 的単位 - < 衛星 > 的単位間関係は安定的成層化の方向へと向かう。

他方、< 部族 > 的単位が連接されて形成されたネットワークは、個々の < 部族 > 的単位にとっては超遠隔地 (= 直接アクセスが不可能) からの物財の流通を可能とするとともに、それが生活必需財の流通網としての機能を増大させることとなると (< staple finance >: D'Altroy, et al 1985) 当該ネットワークへの依存は、直接相互交渉・交換パートナーとしての隣接、ないしは近隣の < 部族 > 的単位との互酬的交換を超えた「疎遠な」単位への依存をも含意することとな

る。このことは、当該ネットワークを構成する<部族>的単位間に共有される、ネットワークの安定的再生産(=物財の入手が滞らない)への<信頼(trust)>の醸成を必要とする。このことは、直接的互酬体験を超えた、二重の相互予期の共有維持のための媒介の存在を必要とする。そのため、このような<信頼>への依存と保持必要性との結節点である<中心地>的単位のリーダーによる<超越的存在(transcendental being(s))>へのアクセスの明示と媒介機能の強化が予測される。

段階3: 第3段階には【<部族>的単位多数により構成されるネットワークのスケール拡大】
【当該ネットワークに流通する(生活必需)財の量的増大と原産地の遠隔化】のいずれか、もしくは両者が進行する。

これらにより、第2段階に創発したネットワークへの<信頼(trust)>の調達は機能的要求を強める。これに対する対応として、第2段階での出現が推測された

- <中心地>的単位のリーダーによる<超越的存在(transcendental being(s))>へのアクセスの明示と媒介機能の強化

のさらなる増強が推測される。そのために具体的に選好された戦略として

- 実体的<超越存在>としてのネットワーク外部的存在との相互交渉を表示確認可能な形に物象化する

がまずはあげられるであろう。その場合、「外部的存在」はただ単にネットワークの空間的延長外部に存在する(場合もあるだろう)のみならず、ネットワーク構成諸単位構成員にその<超越性>が容認されるような属性、すなわちその供給しうる給付財に投入された高度な技術や、それを可能とした、高い社会的複合性・複雑性などを保持することが、その機能充足の必要条件となるだろう。また

- <超越存在>との媒介者の存在様態の、他に対する隔絶性の強化

も、これに付随して進行することが想定される。隔絶性の強化の具体的戦略としては

- <超越存在>としての外部接触により入手された物財(物質文化アイテムから人間を含む生物までを含む)の表示効果の強化
- その社会的存在そのものの隔絶性の強化戦略としての出自集団と婚姻対象範囲の限定化

が想定される。

以上のような選好の進化的過程(変異の拡大 選択圧 (偶発的) 特定変異の定着サイクルの反復)の進行が阻害される要因としては

- 実体的<超越存在>の「揺らぎ」、すなわち社会的統合体としてそのような単位の弱化や解体(これにより、それとの交渉を物象化・表示する物財の供給が途絶する、もしくはそのような物財の表示する象徴的意味性の変容/変質する)
- そのような<超越存在>との交渉の継続の困難化

などが想定される。そのような、<超越存在>の参照に媒介された広域相互交渉・交換ホライズン-ネットワークの存続の困難化という事態への進化的・機能的対応としては、

- <超越存在>の「非実体化」 <超越存在>の<神格化>

がその典型的戦略の一つとして想定される。これにより、<財>の継続入手と表示による<超越存在>との実体的交渉の物象化の不可能化のリスクの回避が可能となる。この選択は、実体的<超越存在>との媒介者機能の強化戦略として上にあげた

- <超越存在>としての外部接触により入手された物財(物質文化アイテムから人間を含む生物までを含む)の表示効果の強化
- その社会的存在そのものの隔絶性の強化戦略としての出自集団と婚姻対象範囲の限定化

の延長線上に可能となる。すなわち

- <超越存在>としての外部接触により入手された物財(物質文化アイテムから人間を含む生物までを含む)の表示効果の強化を、外部接触により入手されたモノではなく、その存在自体が(非実体的)<超越存在>との接触を象徴的に物象化するような効果を持ったモノにより置き換える 【物的表象のモニュメント化戦略】
- その社会的存在そのものの隔絶性の強化戦略としての出自集団と婚姻対象範囲の限定化をさらに強化する 【媒介者出自の王朝化戦略】

である。また、これら双方の機能の統合的強化戦略として

- 【媒介者の超越存在化=神格化】

が機能的に適合する。すなわち表象=物象化の対象そのものを超越化によって、その表象に超越性を付与するという超越者参照の<自己言及>化である。このことにより、超越者に対する無制限の信頼=従属と、それに準拠したネットワークへの信頼と、ネットワークへの信頼に依拠した超越者への無制限な贈与と、それに媒介された(超越者の超越性が共有される領域内における)超越者=王の存在に保証-媒介された広域交換-流通領野の維持・再生産が安定的に保証されることとなるのである。

ここにいたり、国家的社会編成の出現基盤が出現する。

今後、<三段階モデル>を補助線として、世界のその他の地域に展開した過程と、それらを駆動した前提条件を析出することにより、国家的編成の形成に至る過程の多様性を析出・検討してゆくことを今後の継続的研究課題として確認した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Mizoguchi Koji	4. 巻 32
2. 論文標題 Making Sense of the Transformation of Religious Practices: A Critical Long-term Perspective from Pre- and Proto-historic Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Cambridge Archaeological Journal	6. 最初と最後の頁 153 ~ 172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S0959774321000366	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Koji Mizoguchi
2. 発表標題 The formation of complex societies seen from religious practices and the concept of 'axiality'
3. 学会等名 日本考古学協会第88回総会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Koji Mizoguchi	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 21
3. 書名 The Oxford Handbook of Cognitive Archaeology (Chapter 45 The Communicative-Cognitive Mode of Existence and Material Differences)	

1. 著者名 Koji Mizoguchi	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Academic Press	5. 総ページ数 11
3. 書名 Encyclopedia of Archaeology (Second Editoon) (Chapter: Post-processual Archaeology)	

〔産業財産権〕

[その他]

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小澤 正人 (Ozawa Masato) (00257205)	成城大学・文芸学部・教授 (32630)	
研究分担者	徳留 大輔 (Tokudome Daisuke) (10751307)	公益財団法人出光美術館・その他部局等・学芸員 (82649)	
研究分担者	辻田 淳一郎 (Tsujita Jun'ichiro) (50372751)	九州大学・人文科学研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	田尻 義了 (Tajiri Yoshinori) (50457420)	九州大学・比較社会文化研究院・准教授 (17102)	
研究分担者	舟橋 京子(石川京子) (Funahashi Kyoko) (80617879)	九州大学・比較社会文化研究院・准教授 (17102)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	内田 純子 (Uchida Junko)	台湾中央研究院・歴史語言研究所・研究員	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

[国際研究集会] 計1件

国際研究集会 人はなぜ国家形成へと向かったのか：日英中を対象としたミクロ-マクロ架橋的比較研究	開催年 2024年～2024年
--	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
その他の国・地域	台湾中央研究院			